

# 高知県四万十川上流域旧東津野村船戸のくらしと音楽

The Life and the Music in the Upper Watershed of Shimanto River,  
Former Higashitsuno Funato District, Kochi, Japan

岩井正浩

Masahiro IWAI

## 1. はじめに

明治維新前夜に吉村虎太郎、上岡胆治、松山深蔵、宮地宜蔵らの勤皇の志士を輩出した旧東津野村は、坂本龍馬が1862（文久2）年3月24日、高知を出発し現在の国道197号線沿いの東津野村を経て、梶原町から松ヶ峠番所、土佐と伊予の県境の葎ヶ峠を越え伊予国に脱藩した村でもある。

旧東津野村は、明治維新後の明治22年の自治制発布で船戸村、芳生野村、北川村が合併して誕生し、<sup>(註1)</sup>平成17年には葉山村と合併し津野町となっている。

四万十川流域は伊予（伊達）、東津野（津野山）、幡多（一条）文化が重層し、後年は長宗我部の支配下となり特有の文化圏を形成してきた。相互に文化圏が交錯し、神楽、牛鬼、花取踊り、五つ鹿踊りや伊勢踊りなど民俗芸能が数多く伝承されている。旧東津野村は梶原町とともに四万十川上流で、名のごとく津野山文化の中心地でもあり、花取踊り、神楽をはじめとする民俗芸能も数多く、牛鬼が秋祭りに登場するなど、伊予文化の影響も無視できない。

旧東津野村高野は船戸の西隣の集落だが、ここには津野山古式神楽、花取踊りとともに、船戸にはない伊予から伝播した牛鬼が伝承され、農村舞台が現存している。さらに文献によると梶原村広野には「鹿踊り」が伝承されていたという記録がある。<sup>(註2)</sup>さらに窪川町の田植歌と花取踊り歌の歌詞にみられる五七七四型が田植歌に残っている。

引用文献における年号は原則として西暦に統一している。

## 2. 津野町船戸地区の概要

津野町は高知県中央部に位置し、面積197.98平方メートルで北部は東から佐川町、越知町、仁淀川町、愛媛県久万町、西部は梶原町、南部は西から四万十町、中土佐町、東部は須崎市に接している。四国山地に抱えられた地域は急峻で、約90%が山林で占められ、農地や宅地面積の比率は低い。葉山地域は中央部を新荘川が、東津野地域は東部を不入山を源流とする四万十川、中央部を北川が流れている。旧東津野村は高知県中部海岸部の須崎市と西部山間部梶原町の間位置

し、2つの川の分水嶺となっている。前者は最後の生存が確認された「かわうそ」生息地の新莊川であり、後者は不入山（1,336.4メートル）を源流とする四万十川である。東津野地域は津野山（土佐）文化と伊達（伊予）文化の境界でもある。津野町は布施ヶ坂を境にして標高差が大きく、現津野町役場の永野地区が68メートルであるのに対し、船戸地区は420メートルである。中央部にある新田（しんでん）は旧船戸村・芳生野村、北川村の接点に位置するため村の中心的集落となった。明治29年に郡道津野山線（現国道197号線）が開通するとともに発展、明治43年に新田に村役場が移されて以来、小市街地を形成した。

『東津野村史』では船戸の地名について次のように述べている。

土佐州郡志に「古太平と曰い後に舟戸と名づく、村の中山出舟入舟の名有り之に由って名づくるか」（原漢文）と書かれており、中越穂太郎著「津野山異談統編」地名の起り十一頁には、「船戸不入山に山積神社がある。神社台帳によると船戸神を右山峯岩上に祭り、後、大山祇（おおやまつみのかみ）、ついで慶長年間磐土神（いわつちのかみ）を祭るとあり、これによれば不入山に船戸神を祭ったのは慶長以前のことであり、ずっと古くから船戸神は祭られてあり、この祭神が地名と変じたものと思われる。船戸神とは伊弉諾尊（いざなぎのみこと）の投げ給まえる杖になりませる神が黄泉醜女（よみのしこめ）を支え留め、尊の身の安全を図った道の神で「くなどの神」ともいえば「ふなどの神」とも言っている。いわゆる「道祖神」のことで津野山地帯では「道ろく神」ともいっている。」<sup>(註3)</sup>

津野町の人口は平成12年の国勢調査では7,258人で、昭和55年の8,712人と比較すると20年間で1,454人（16.7%）減少している。さらに平成22年度になると、6,407人に減少し、津野町全体では平成22年人口が昭和35年より半減している。また合併後の旧東津野村船戸は433人である。

	津野町	葉山村	東津野村	旧東津野村船戸
昭和35年	13,249	7,480	5,769	
昭和55年	8,712	5,175	3,537	
平成2年	8,000	4,920	3,080	
平成12年	7,258	4,425	2,833	
平成22年	6,407	—	—	433（世帯数182）

船戸地区の年齢構成は、

0～9歳	37（男15、女22）	50～59歳	68（男42、女26）
10～19歳	30（男17、女13）	60～69歳	53（男26、女27）
20～29歳	32（男21、女11）	70～74歳	30（男15、女15）
30～39歳	49（男28、女21）	75歳以上	95（男38、女57）
40～49歳	39（男23、女16）		

合計433（男225、女208）<sup>(註4)</sup>

年齢構成では50歳まではほぼ平均した構成だが、60歳以上が全体の41%、70歳以上が29%を占めている。ただこの割合は極端な限界集落化とまでは言えないかもしれない。その要因は、以前、船戸と葉山村白石間約3キロにおよぶ布施ヶ坂の連続したヘアピンカーブを越すのに数時間要

し、国道197号線は「イクナ酷道」とも揶揄されていたが、平成に入って布施ヶ坂トンネルとバイパス開通で、JR土讃線須崎駅までわずか40数分に短縮されたことにあり、20～50歳世代28%の中高年を定住させていることにつながっているとも考えられる。それは河内神社の秋祭りにおける小学生から中高年に至るタテ世代の伝承にあらわれてもいる。ただ、車での移動が主体となったことは、公共交通機関としてのバス運行を窮地に陥れているともいえる。実際、2013年度の調査では、JR土讃線須崎駅からバスで船戸へ向かったが、45分間の乗車中、一人も乗り込んでくる乗客がいなく、バスは停留所をノンストップで通過するという状況を体験している。

船戸地区の職業別就業者数は、(総数=222)

管理的職業=3、専門的・技術的職業=16、事務=17、販売=14、サービス=21  
 保安=3、農林漁業=75、生産工程=18、輸送・機械運転=9、建設・採掘=37、  
 運輸・清掃・包装等=9、分類不能の職業=0<sup>(註5)</sup>

最も多いのは農林漁業(漁業は川漁)で、第一次産業従事者が全体の三分の一に達している。1996年の調査では自給自足的農業から茶、栗、養蚕、シイタケなどで高原農業が確立され、農業の兼業化も進行していた。2013年時における農業について戸田卓夫氏は、「約700名でハウス(ピーマンなど)、椎茸、米(自宅用)、ショウガ栽培を行っている。ただ林業は厳しくなっている」<sup>(註6)</sup>と語っていた。

### 3. 船戸河内五社神社の秋祭り

船戸河内五社神社については次の記述がある。

主神は大山祇神で、ほかに一七神を配祀。旧郷社。船戸の鎮守。近郷に河内神社が多いのは、土佐・伊予両国山間の諸村が当社をことに尊崇し、土地を開拓する際には必ず勧請するか遷拜所を建設したからという。天正一六年(1588)の津野惣郷神社帳には「河内大明神 本社五尺四方 舞殿横殿五間」とあり、同年の津野船戸村地検帳には一反二五代余の神田がみえる。享禄二年(1529)の「願主新左衛門吉信」という銘の棟札があり(蠢簡集)、「高知県神社明細帳」は寛永一四年(1637)・寛文一〇年(1670)・元禄一二年(1699)の棟札があったことを伝える。例祭は十一月一〇日。境内社は津野神社など三社。<sup>(註7)</sup>

1996年度の祭りの構成は、

13時集会所で1庭、津野18代墓前で花取踊りを1庭踊り神社へ向う。

14時10分から境内で花取踊り始める。

そして10年前に復活した伊勢踊り、「浦安の舞」、花取踊りが行われた。ただ神楽は中断していた。

2013年度は、10時に集会所を出発し、津野18代墓前で花取踊りを1庭踊る予定が降雨のため中止、10時35分に太鼓を打ちつつ神社に到着した。ここで16庭を踊る。踊り子は5歳から小・中学生そして57歳までの成人で、小太刀11、大太刀10で構成している。リーダーは30歳の青年である。

神楽殿では10時50分から神事が始まり12時05分まで続いた。その後花取踊りチームと境内に設置された神棚をお祓いする。神楽殿は376×368センチ、高さ18センチで、据付け太鼓は直径=65

センチ、バチ=37センチであった。引き続き「氏子入り」(4名)と「七五三」も同時に行われ、境内では竹筒で酒を炭火で温め餅つきも始まった。

(写真①「氏子入り」2013年)

神事と並行して11時05分から花取踊りメンバー5人による伊勢踊りが境内で始まった。12時23分から35分まで「浦安の舞」が中1、3年生によって神楽殿で並行して舞われた。さらに並行して花取踊りが始まり、船戸河内五社神社は次第に様々な音の世界に包まれていった。

(写真②「浦安の舞」2013年)

#### 4. 花取踊り

1996年に実施した第1回船戸河内神社秋祭りの1年前、東津野村立船戸小学校五・六年生が1995年12月25日に作成し発行した『船戸の伝統文化—花取り調べ』<sup>(註8)</sup>は小学生が調査した貴重な報告書である。彼らの中にも花取踊りを担っている子どもがおり、まれびとでは出来ない地元の方々との聞き取りを行っている。ここではその中から花取踊りの踊り方について、引用させていただくことにする。なお一部、現地の花取踊り歌詞に合わせて漢字になおした箇所、補足した箇所もある。2013年に再調査した際、踊りの輪の中には、当時の小学五・六年生が親となって彼らの子どもとともに花取踊りを踊っている姿があった。まず2列で鳥居から踊り場まで踊りつつ移動する。

(写真③「庭ハライ」1996年)

##### 1. サアノ庭ハライ

大太刀の踊り=二列になって踊る。「ヒャー」は隣の大太刀と刀をすれ違わせて、隣と入れ代わる。隣の大太刀と入れ代わったら、刀先を持ち隣と向い合っておじぎをする。

それを4回やって、終れば「両車」に移る。

両車=刀を切ってはらって、左右で回す。「ヒャー」とは違い、やっている時に横へ寄り、隣の大太刀とすれ違うようにする。それを4回やって終わり。

切って指に挟み足こぎ=名のとおりで、切ってはらって、一度止まる。この時に刀を上を持ってきて、指の又に刀を挟む。刀を縦にして、片手で刀をすくようにして刀の下へ手を持ってくる。ケンケン(足こぎ)で後へ下がっていく。

##### 2. イレハ=太鼓2人、音頭、脇音頭で踊る踊り。主な踊りは座って刀を振り回すという踊り。これが一番迫力のある踊りだろう。(写真④「イレハ」2013年)

##### 3. エッケ=初めて小太刀が踊る踊り。<地足>をした後に両はらいをして、大太刀は前へ出て小太刀は招き、また入れ代わる。この時小太刀は刀を鞘から抜く。「エッケ」自体は刀を回し、うつ伏せになった後に、刀をはらい上げる踊り。小太刀の入る踊りは最後に切ってはらってケンケンというのがある。(写真⑤「エッケ」2013年)

##### 4. クルマ=「両車」に似ている。「両車」と違うのは、これは片車という名のとおり、片方だけで回し踊る踊りである。小太刀に間違える人がよくいるほどに、難しい。

##### 5. シンボ=刀を「エッケ」のように回しながら脛をつくように座ってうつ伏せになり、刀をは



- らい上げながら自分も体を起こす。それを4回繰り返す。
6. チガエ太刀＝「チガエ太刀」は、「カマ」に移る前に、大太刀は時計回り、小太刀は反対回りで場所を移動するための踊りである。最初一緒にいた小太刀と一緒にになったら、一度終わって「カマ」に移る。(ここで「チガエ太刀」が終わると、小太刀の持っていたカマを持ち、大太刀は小太刀の持っていた刀を持ちます)
  7. カマ・1＝「カマ」は踊りの中で一番きれいな踊りと言われています。小太刀、大太刀がすれ違って前へ出て、後へ下がってカマを持った小太刀が大太刀の首にカマをひっかけて前へ持っていきます。これを4回繰り返します。終わったら「カマ・2」に移るために小太刀はカマを逆さに持ちます。(写真⑥「カマ・1」2013年)
  8. カマ・2＝これは、大太刀が刀を上へ上げて、小太刀をけります。小太刀は逆さに持ったカマを振り回して、けりを防ぎ、これを4回繰り返します。
  9. カマ・3＝踊りは今までとはそうかわりはないが、「カマ・3」はまでのカマ踊りと太鼓のリズムが違う。なぜかと言えば、「カマ1、2」の最初にはく地足>というただ歩くだけだったのが「カマ・3」はケンケンというのにかわって、たたき方がそこからかわっていったから。
  10. モドリ＝「モドリ」は、「チガエ太刀」とは逆に回り、もとの小太刀の場所へ戻るための踊り。左上の図のように刀の刃を自分の後方へ向けて違う小太刀とすれ違って行く。
  11. キリマキ＝先の「モドリ」のように、切ってはらって刀を指の又に挟むまでは一緒。今度の踊りは刀の刃を下に向けて、片方の手で刀をすくうように下にすえます。そして小太刀大太刀がその体勢で、ケンケンをしながら場所を交代します。
  12. ミックバミ＝「ミックバミ」はくへイと掛け声をかけ、脛をついて座り、刀を動かしてまた立ってというのを4回繰り返します。この踊りはとてもしんどく、大変なものです。
  13. ジザイゴウツキ＝これはまず、刀を前にかまえ、ケンケンで前へ出ます。そして少したつたと思ったら刀をそのまま体をひねり、回りながら後へジャンプします。この時、自分の隣の人を切りながらいくつもりで、刀を鋭くひきます。これが「ジザイゴウツキ」です。
  14. ヒケハ＝これは上の歌が終わるまで、全員大太刀小太刀が両ばらいをして、歌が終われば普通の大太刀小太刀はここでこの踊りは終わりです。後の神5人が「イレハ」を踊ります。  
(小太刀の踊りはここまでです。次は大太刀だけの踊りです)
  15. がわの庭ハライ＝これは4種の踊りがある。まずはじめは刀を縦に回し上のようにうつ伏せになって、隣の人と交代する。これを半周すれば次の踊りに移る。回り方は上ようになります。白丸の人は逆時計回りで黒丸の人は時計回りです。  
次の踊りは「モドリ」の体勢で一度ジャンプします。そしてもう一度ジャンプをするのですが、この時には隣と交代します。これと先の踊りは、交代すると円の中におじぎをします。  
次の踊りは「両車」をして、刀の刃を上向け、隣の人とすれ違うようにうつ伏せになります。そして体を起こして隣と交代します。  
最後です。これはくへイと同じ体勢になって刀を上へ切り上げます。そして静かに隣と

交代します。「エッケ」のように刀をまきながら脛をつくというのが〈ヘイ〉と違うところ  
です。(写真⑦「がわの庭ハライ」2013年)  
ここで踊りは終了です。

〔資料①：「船戸花取踊保存会による「花取り踊りの由来」〕

花取り踊りは天文年間(1532～1554)半山城主津野氏の支城須崎新荘の花鳥城を一条公が改  
めたが堅固乃城で容易に落とすことができず、京都から伝えた踊りを新荘川兩岸の平原で踊  
り、その踊りに城兵が見惚れている際に改め入り落城させたことから「花取り踊り」と呼ば  
れるようになり、これが土佐における花取り踊りの始まりと言われてます。(異説もあり)船  
戸にこの踊りが伝えられたのは、文化年間(1804～1817)佐川城主深尾家の家臣恩田武芸八  
勝之進が大植村(仁淀村)に追放になりそこから船戸に伝えられたと言われてます。以来船  
戸河内五社神社に無病息災家内安全を祈願して十五場からなる花取り踊りを奉納しておりま  
す。<sup>(註9)</sup>

〔資料②：2013年11月10日に踊られた「花取踊り」歌詞〕

1. (サアノ庭ハライ)

初. ムシロまでコロバシ我がムシロ神歌まで  
トン・トートンで神(さがえ)で太刀見せ

①ヒャー ②両車 ③切って指にはさみ足こぎ

2. (イレハ) 歌. ヨーここ聞けゃヨー山あとおりける

ヨー聞けずばヘッのーぼーりー ヨーイヤはーねーこす

3. (エッケ) 歌. ヨーおれどもはヨーうーインイの花取

ヨー悪しくとヘッ善ーくと ヨーイヤおーしょーなれ

4. (クルマ) 歌. ヨー花取はヨー七日はらいに ヨー怪我すなヘッ村の

ヨーイヤ若い衆

5. (シンボ) ソゾリ (巻いてすねをつく)

6. (チガエ太刀) 歌. ヨー津野様のヨーめーしーイた兜に

ヨー咲いたるヘッ花は ヨーイヤなーにー花

7. (カマ. 1) 歌. ヨー奥山のヨーかーんーこみ山の

ヨーつつじのヘッ枝が ヨーイヤ二枝

8. (カマ. 2) 歌. ヨー枝ははヨー神にささげん

ヨーまたーヘッ枝は ヨーイヤ身のため

9. (カマ. 3) (ソゾリがわえ刈る)

10. (モドリ) 歌. ヨーあれ見よやヨー川の瀬を見よ

ヨー早瀬にヘッもーくーが ヨーイエ止ーまらん

11. (キリマキ) 歌. ヨー松風はヨーおーろすよもそろう

ヨーおろさずヘッあーかーす ヨーイヤよーもーそろう

12. (ミツクバミ) ソゾリ ヌケバチ ヘイ

13. (ジザイゴウツキ) 歌. ヨーこいしゃぐまヨーうすぎとうずみ

ヨー今こーそヘッえーどーり ヨーイヤよせる

14. (ヒケハ) 歌. ヨーひけひけぎヨー回れ小茶臼

ヨーばんばとヘッおろせ ヨーイヤ小葉の茶

ヨーひく茶よーりヨー回る臼より

ヨー茶ひきのヘッ女郎が ヨーイヤ目につく

(地足で神を背一列歌が終るまで下 踊子は両ばらい 神に向いて止る)

15. (がわの庭ハライ)

呼びだいで輪になり太刀まじえ

神(さかえ)で太刀見せ

①両車 ②ヒャー ③腹合せ ④巻いて座る

大太刀のみが被る「カシラ」は東天紅の毛の中に山鳥の毛を差し込んで作っていて、まっすぐに立てることが重要である。太刀は、大太刀が持ち手部分=40センチ、刃部分=40センチ、つながりが10センチで、約1メートル、小太刀は手持ち部分=17センチ、刃部分=36センチ、つながりが1センチで約54センチである。カマは手持ち部分=28センチ、刃部分=8センチで、踊りの表現は草刈りや稲刈りの仕草からきていると言われている。

楽器は鉦と締太鼓で、締太鼓は直径=33.5センチ、厚さ=12.5センチ、内径=26.5センチで軽量化のために内胴はビニールパイプに改造している。衣裳は前述のカシラ、たっつけ(裁付)、帯、腕抜き、袴、足袋、草履、そして背中へ垂らしたたくりである。2013年度の花取踊りは、「花の御礼」や休憩を含め1時間37分であった。体型は四万十流域の他の花取踊りとは違っており、それらは境内の踊り場までの踊りがいくつかあること、筵を円形の中、外に敷き直したり、円形の外を太鼓を打ちながら移動すること、演目によって踊りが明確に指定されていること、踊りにかなりの技術を必要とすることなどである。

#### [花取踊りの実際]

①鳥居下付近で2分20秒踊って一旦止める。

②庭ハライ=行進して鳥居から踊り場(境内)へ。

四分の二拍子：タンタタ タンタタ | タンタタ タン\* | タンタン タンタン | タンタン タン\* |

(\* = 四分休符)

③イレハ=踊り手が太太刀3、締太鼓2、円外でチャップ。筵を敷き直して円型に。

④小太刀11、大太刀11(大太刀不足で平服の大人2名参加)。二重円となって大・小太刀が交互に入れ替わる。(花の御礼)

⑤太鼓が大きく円外を移動、右回りで半周する。1匹の獅子が登場し見物人の間を回る。

⑥小太刀が太刀とカマを取り替える→「カマ1~3」 (15分程休憩)

津野山古式神楽は続いている。

⑦「花取りの由来」の説明の後再び太刀を持つ。

「モドリ」＝最初の体型へ左回りで戻る。筵も敷き直される。(花の御礼)

⑧「キリマキ」「ミツクバミ」

⑨「ヒキハ」＝5人(最初の「イレハ」と同じメンバー)

⑩「がわの庭ハライ」＝大太刀のみ。

船戸の花取踊りは、多彩な演目によるフォーメーションの転換が魅力であり、演じる側、見る側双方に花取踊りの醍醐味を味わわせるものであった。

## 5. 津野山古式神楽

津野山古式神楽は延喜の頃、藤原経高が津野山に入った時に三島神社を祭り始めた当時より伝承されてきているとされている。昭和29年に津野山神楽保存會が刊行した『津野のみやび』に「津野山神楽基本形式」が語られている。

津野山神楽の形式は爪先におく場合と踵におく場合の二つがあり、歩く場合でも爪先と踵だけで歩くと云われております。舞う場合は爪先で立つて舞い、舞い進む場合は踵で舞うとゆう様に爪先と踵と交互に動かして舞うのが形の基本となっております。正面に神楽歌を奉唱する御歌役が座り、側面に楽人が控えます。楽器は大太鼓、締太鼓、鉦、笛を用います。舞人が舞殿に入り着座しますと、御歌役の神楽歌をうけて奉答歌を唱い立つて一さし舞い、また神楽歌をうけて舞う、とゆう順序で、一つの歌に対して一つの舞があることとなります。この舞には一貫した儀式があつて、あらゆる舞の中に、五方を引くと申しまして五元の神に祈りを捧げます。(中略) 舞人が合唱する場合は、東方に坐る舞人が神楽歌を出し、他の舞人は中途から和すとゆう式となっております。所用時間は八時間余を要します。(後略)<sup>(註10)</sup>

藩政期には、現在の栲原町と津野町の一部の地域を合わせて津野山郷と称し、1つの行政区で、栲原掛橋家を中心に1つの神楽組があり、津野山神楽として郷内の秋祭りに奉納巡行していた。昭和23年栲原町保存会が結成されたことにより、東津野村保存会も結成され、津野山神楽は2つの神楽組に分立し、東津野村(現：津野町)では津野山古式神楽とも称している。国選択の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財で、選択年月日は 昭和51年12月25日、所在地・所有者は高知県高岡郡栲原町および津野町で、栲原町津野山神楽保存会と津野山古式神楽保存会である。

栲原の津野山神楽と津野町の津野山古式神楽には舞所作に多少の差異があり、津野山古式神楽は11月15日河内五社神社(北川地区)、16日三嶋神社(高野地区)、19日諏訪神社(芳生野地区)にて奉納される。以下は1993年栲原東区と1995年に栲原西区竹の藪における津野山神楽の調査時の演目とその内容についての概略である。これら2つの神楽には舞人・衣裳・採物の数に異なる部分もあるが、編成を多く設定している方を採用した。<sup>(註11)</sup>

①宮入り：舞人5人。楽器(太鼓、締太鼓、鉦)、面無。衣裳は唐絹、袴、烏帽子。

採物は袖、鈴、幣、扇子

舞始め、全員揃って舞殿で神楽の由来を述べる。

- ②襖祓詞；衣裳は唐絹、袴、烏帽子。降神の儀。
- ③幣舞：2人。楽器（太鼓、締太鼓、鉦）、面無。唐絹、袴。採物は幣と扇子。  
2人で幣を持ち舞う。神をたたえ国ぶりを讃える歌が6種あり、これから始まる16種の神楽に対する前奏曲。
- ④手草：2人。楽器（太鼓、締太鼓、鉦、笛）、面無。衣裳は唐絹、袴、烏帽子。採物は扇子、幣、榊、鈴。天児屋根命、布刀玉命、神楽を舞われた天鈿女命と、お手を取って引き出された手力男命の功績を称えたもの。
- ⑤天の岩戸：1人。楽器（太鼓、締太鼓、鉦）、面有。衣裳は唐絹、袴、冠、被り物。
- ⑥悪魔祓：4人。楽器（太鼓、締太鼓、鉦、笛）、面無。柄着物、袴、烏帽子。採物は剣、幣。
- ⑦大蛮（だいばん）：1、2人。楽器（太鼓、締太鼓、鉦、笛）、面有。柄着物、たっつけ。採物は榊、シデ、幣、扇子（腰）。鬼面の大蛮が榊を両手に持って7つの宝（福の牙、才の牙、5行玉、志杖杖の牙、5順明の眉作り、隠れ蓑と隠れ笠、7石入の富の俵）を自慢に四方に威力を誇示する。赤面だが妖気が感じられない鬼面。東・南・西・北神の武力には屈服しないが最後の中神の条理を持った説得に応じ、7つの宝を返し御祓を受けて元の善神に戻る。生後一月未満の乳児を抱いて5方の神々に息災を祈ってもらう。  
（写真⑧「大蛮」2013年／写真⑨「神楽囃子」2013年）
- ⑧花米（はなよね）：1人。楽器（太鼓、締太鼓、鉦、笛）、面無。唐絹、袴、烏帽子。採物は幣、鈴、扇子、剣（腰）。三方に白米を奏時して、5方の神々に感謝の祈りを捧げる厳かな舞。
- ⑨折敷（おりしき）：1人。楽器（太鼓、締太鼓、鉦）、面無。着物、袴。採物は平盆2個。余興舞の一種。竹の藪では舞われなかった。
- ⑩二天：2人。楽器（太鼓、締太鼓、鉦、笛）、面無。柄着物、袴、烏帽子。採物は神剣、幣、扇子。神人一体の境地を歌う。
- ⑪山探し：1人。楽器（太鼓、締太鼓、鉦、笛）、面有。紫の袴、被り物、たっつけ。採物は幣、扇子、剣。金山彦のお使いの神が紛失した宝剣を捜し歩くところから始まり、後に宝剣を見つけ歓喜するところで舞終わる長時間の舞。
- ⑫鯛つり：1人。楽器（太鼓、締太鼓、鉦、笛）、面有。唐絹、袴、帽子。採物は扇子、釣り竿。「えべっさま」とも称される七福神の一人。
- ⑬鬼神退治：2人。楽器（太鼓、締太鼓、鉦、笛）、面有。唐絹、袴、たっつけ。採物は榊、弓矢、幣。黒褐色の平べったい鬼面。両舞で大国主命の御子建名方神と戦われた建御雷神の神話を劇的に仕組んだもの。
- ⑭豊饒舞：2人。（太鼓、締太鼓、鉦）、面有。袴、烏帽子、唐絹。採物は竿、扇子、打出の小槌、幣、鈴。俗にお稲荷さん（宇賀魂神）と大黒様（大国主命）の舞。五穀豊穡と商売繁盛の徳を授ける舞。
- ⑮四天：4人。楽器（太鼓、締太鼓、鉦、笛の6名）、面無。唐絹、袴、烏帽子。採物は扇子、

剣、幣。最後の舞で、剣を抜き放して4人で舞う解願の舞は気高く荘重。諸人のあふれる祈りを花米に籠め、感激のうちに四天を解き、終了する。

なお、『津野のみやび』（前出）では、この15演目に加え、弓舞、猿田彦、長刀、妙味の4演目が紹介されている。<sup>(註12)</sup>

## 6. 伊勢踊り

1634（天正8）年に土佐一宮（いっく）で踊ったと言われる「お伊勢踊り」は、津野山一帯にも伝承されている。『東津野村史』によると「伊勢の皇太神宮の大麻を持ってきていた伊勢太夫が伝えたとの伝承がある。昔は部落の主要な祭礼の時、氏子たちがその神前に整列し手に玉串を持ち、太鼓、鉦の楽に合わせ、歌いながら踊るのである。祭礼時のほか、氏子に大病人などの出た場合、願をこめるために踊り、また解願に踊った。」<sup>(註13)</sup>と記されている。

この踊りは四万十川流域の十和地区口大道・浦安、窪川地区松生原、梶原地区松原など他地域とは違って独特である。一般的には円型となりゆったりとしたテンポでかなりの時間をかけて歌い踊るのであるが、2013年度の伊勢踊りは、神事と並行して花取踊りメンバー5人が境内で花取踊りの衣裳で、太鼓を打ちながら鳥居から神棚まで進み、歌をリーダーが歌いつつ4人（うち2人は締太鼓）が立ち・座り踊る。

太鼓のリズムは四分の二拍子で、♪=80の「タンタ タン | タン \*」を繰り返して踊る。

(\* = 四分休符) (写真⑩「伊勢踊り」2013年)

### [資料③「伊勢踊り」歌詞]<sup>(註14)</sup>

[イレハ] 花のお江戸でうずらがふける 何人とふけるや、立寄り聞けば  
御世は末代世の中よかれ 鳥が歌えどもいのおしやる  
鳥は八万八声のものよ たんだ一時、でてねてござれ  
(お伊勢お一だ)

踊ろよ・・・オンお伊勢踊りを一踊り（座って）

(立って)

インヤお・・・伊インお伊勢お・・・だの神祭り（2回）

インヤむ・・・（ウンうりこくりをたいらけて）

インヤ神インイ世若世の国とも

インヤちイさとの末の人までも

インヤお参りげこうの目出たさよ

（インヤお伊勢踊りをオン踊り踊りてなぐ  
さみ見れば国も豊かに血汐も栄える目出たさよ  
インヤお伊勢踊りを目出たさよ

[天の岩戸] インヤ天アンアの岩戸の神かぐら（2回） インヤ月インイに六どの神楽より  
インヤ千ぐよりも万ぐよりも インヤお参りげこうの目出たさよ  
[東] インヤ東は関東奥までも（2回） インヤ老若男女をおしなれて

	インヤお参りげこうの目出たさよ	
[南]	インヤ南は紀州にくまのの(2回)	インヤ里末々の人までも
	インヤお参りげこうの目出たさよ	
[西]	インヤ西は住吉天王寺(2回)	インヤ四国づくしの人までも
	インヤお参りげこうの目出たさよ	
[北]	インヤ北は越前能登や加賀(2回)	インヤ越後信濃の人までも
	インヤお参りげこうの目出たさよ	
	インヤ千早五平のさかきをたてまつる	インヤ心のまかせや恵む踊り
	インヤよろこぶ昔々人が皆	インヤおとしは千とせを保なり
[後の踊り]	お伊勢の踊りおんだ踊り目出たい踊り	成猪のすみえ泉が出来て
	飲めどもかわかずくめどもつきせず	百に米四斗売ろ升がなけりゃミで売ろ
	三年は作り取り七年はやくなし	

## 7. おわりに

1996年と2013年に実施した船戸河内五社神社の秋祭りは盛大に行われた。津野山古式神楽の復活で、神事、「浦安の舞」、伊勢踊り、花取踊りが重層的な音の風景となって住民に心地よい感動を与えているようであった。まれびとを招聘するのでもなく住民が無病息災祈願、五穀豊穰感謝という1年の敷かれた行事の1つとして祭りを実施している。津野山古式神楽と「浦安の舞」を11月10日の秋祭りに統一したことで祭りの規模が大きくなった。

船戸は400メートルを越す標高を生かした第一次産業の展開、バイパスとトンネル開通で須崎市などに40分程度で移動することが可能となった。船戸の過疎化速度は他地区と比較するとゆっくりと進行しているように思えた。過疎化、限界集落化は道路事情、学校の統廃合などの諸条件によっても違って来る。子どもが学校に通学バスで通えること、地場産業のあり方などにより地元で軸足を置いた生活がある程度可能化できる状況であることが、今日の状況下においては祭りを維持・継承する大きなカギに成りうるといえる。四万十川源流に位置し、幕末の動乱期に新時代の幕開けに奔走した獅子たちを輩出した船戸を含む東津野地域は、歴史と現実を内包した歩みを続けている。

最後に1996年度調査でお世話いただいた松岡一幸区長、西元敏晴氏、久原良充氏、2013年度での松岡民雄区長、戸田卓夫氏をはじめ船戸地区の方々に厚く御礼申し上げます。

### [註釈]

註1：東津野村史 高知県高岡郡東津野村教育委員会 平成17年 p.351。

註2：前掲註1「是市ばなし その二 鹿踊り」pp.731- 732。ただ、愛媛県境の地であることから伝播の可能性はなくはないが、『梶原町史2』にはこれに関する記述はない。

註3：前掲註1『東津野村史』 p.736。

註4：広報「津野町」（高知県高岡郡津野町役場）2013年10月号より抜粋。



註5：平成22年（調査日 2010年10月1日）の国勢調査による。総務省統計局

「高知県高岡郡津野町船戸の職業別(大分類)就業者数」人口統計ラボ(toukei-labo.com)。

註6：2013年11月10日の聞き取り。

註7：『日本歴史地名大系 第40巻 高知県の地名』平凡社 1983年 pp.455-456。

註8：船戸小学校5,6年生『船戸の伝統文化—花取り調べ—』東津野村立船戸小学校 1995年  
文中に掲載されている踊り図は省略している。

註9：船戸花取踊保存会 2013年11月10日入手のコピーより。なお「半山」は昭和31年に葉山村改称される以前の地名。

註10：掛橋静枝「津野山神楽基本形式」『津野のみやび』津野山神楽保存会 昭和29年 pp.35-36。

註11：1993年10月30日 高知県高岡郡梶原町東区三嶋神社「津野山神楽」

1995年11月23日 高知県高岡郡梶原町西区竹の藪三島神社「津野山神楽」。

註12：『津野のみやび』（註10）弓舞（1人）(P.93)、猿田彦（1人）(P.99)、長刀（2人）(P.101)、  
妙味（2人）(P.103)。

註13：前掲註1『東津野村史』 p.745。

註14：2013年11月10日 船戸にて受領歌詞カード。



写真①「氏子入り」



写真⑥「カマ・1」



写真②「浦安の舞」



写真⑦「がわの庭ハライ」



写真③「庭ハライ」



写真⑧「大蛮」



写真④「イレハ」



写真⑨「神楽囃子」



写真⑤「エッケ」



写真⑩「伊勢踊り」